

町から10キロ離れたところに、仮設の遊園地があり、ダンスホールがありました。父も母も友達と共に出かけ、そこで知り合ったそうです。父は兄弟が多く、10人兄弟の2番目だった。母は2人兄弟で兄がいました。

大熊:どこに惹かれあって?

話してくれませんでした(笑い)。昔は、そういう話は子どもにしないのがふつうでしたから。

大熊:お友達を作るのが得意なのはなぜだと?

調和が取れた家庭環境が土台にあったからだと思います。母が亡くなる前、母とよく、長く話をしました。母は「ベクトルは、ものごとを明るく見る、楽天的性格に生まれた」といっているしたが、これは母のおかげだと思います。これは母に似ているんです。

大熊:目は今から思うと小学校の前より悪かった、とおっしゃいましたが、兆候としては?

異常があることは、学校での検査で見つかりました。検査の時、5メートル離れた紙に指がかいてあり、指先がどこを向いているかを尋ねられたのですが、見えなかった。それで先生から眼科の医者に行きなさい、と言われました。

眼科の医師は網膜に斑点があって、医者はその写真をとって見せてくれた。幼いとき、母がサクランボが入った器を落として、「入れ直してちょうだい」と言われたのに全部入れ直す事が出来ず怒られたことがあるそうです。後になって母が、「あのときは見えなかったのね」とわびてくれました。自分は覚えていないけれど、母は覚えていたのです。

眼鏡はかけませんでした。網膜に斑点ができて視覚を妨げる病気ですから、眼鏡をかけても見えなかったのです。学校の検査は8歳、2年生になるときでした。今ではスウェーデンではそのような検査は4歳の時にします。目だけではなくすべての検査をします。サクランボの事件は4歳か5歳の時ですから、今だったら、もっと早く見つかったことでしょう。

学校の検査で視覚に障害がある、と聞いたとき、両親は、どのくらい前からその事があったんだろう、と考え始めたようです。ふたりにとってとても心配な事だったろうと思いますが、私にはそれを感じさせませんでした。私自身はというと、14歳になって、ひどく重くなる頃までは、視覚障害を感じなかったのです。

私自身が心配になってきたのは、サッカーやハンドボールでとんでもないミスをしたときです。友人は、ただのミスと思って笑っていたのですが、私は、見えないからミスをしてしまったのではないかと心配になってきました。

自分でも心配になったのは、居間の壁にかかっていた時計をじっと見ていたら、時計が急になくなったときでした。目を横に動かすと、時計が見えました。そこで、自分でも目が見えない、とわかりました。14歳の頃、自分でも意識するようになりました。おそらく少しずつ悪化してきたのだと思いますが、そのころ急激に悪化したようです。当時、私1年間に16センチ背が伸びていました。それと同時に、視覚も衰えて大熊ました。16歳で190センチになり、止まりました。おそらく16歳ですべてマキシマムに達したのではないのでしょうか(笑い)。

大熊: 文字を見るとときに支障はなかったのですか？

読むのは非常に難しかったです。盲学校で勉強した後、一般の高校、大学に行きました。この6、7年は一番大変でした。6歳7歳の頃は、運動で秀でていましたが、成績もかなりよく、トップクラスの一人でした。自分にとって大事なのはスポーツで秀でる事で、学業の方にはあまり関心がなく、特別に勉強したわけではないのですが、宿題が出れば出す、という風でした。義務教育の終わりの頃は、父と母が自分のために本を読んでくれた。ただ、私は、昔からエネルギーがありすぎて、今このエネルギーをどうしていいからわからないくらいです。

大熊: 勉強が出来るのだから、配管工で身を立てよう、と考えた事はなかったのですか？

思いませんでした。当時は、非常に伝統的な考えをしていて、親もそれ以上の考えを持っていなかったのです。父はその後、配管会社を自分で興しました。彼としては、会社を私に継いでほしい、と思っていたのでしょう。ブルーカラーの人にとって、それは普通の事でした。

北野: 当時、ブルーカラーの人にとっては一戸建ての家は普通だったのですか？

集合住宅が普通だったのですが、両親が家を買った頃に、職人でも一戸建てに住む、という傾向が少しずつ出てきて、周りでも一戸建てに住み始めたころでした。姉二人とも、高等教育を受けるようになったので、そのころから変化が出てきたのかもしれませんが。私が盲学校で勉強して、リハビリを受けて戻ってきたとき、父はこの子のためにはアカデミックな道に進むのが一番いいだろう、と思ったようです。

■父母が読めない外国語の教科書を朗読してくれました■

もう一つ私の生い立ちに大きな意味を持っている事があります。

盲学校にいた頃、私は自分のエネルギーをどう使っているかわからず、困っていました。学校には何人か音楽をやる友達がいる、ドラマーがいなくておまえやれ、と説得され、ドラマーとしての教育を受けました。

16歳で盲学校を卒業して自宅に戻ったとき、すぐにダンスレストランでドラマーとして仕事を始め、その後、ジャズクラブなどでも演奏するようになりました。父は自宅の地下室に防音の練習部屋を作

ってくれました。19歳の時には、将来を囑望されるジャズプレーヤーだったのですよ(笑い)。その後、大学に入ったときは有名なプレーヤーでした。私は大学での勉強は他の人の倍かかりました。普通は大学を卒業するのに3年から4年ですが、私は8年かかって哲学の学士をとりました。でも、私はドラマーとして学費を稼ぐ事が出来たので、非常に幸運でした。8年の学費を稼ぐためにドラムを叩いたのです。

大熊:盲学校ではどのようなリハビリテーションをうけたのですか？

まずは点字を覚えること。それから、目が悪い、ほとんど全盲であることを受け入れる事。さらに、盲人としての生活していく上での実際的なこと。友人の手助けが非常に役に立ちました。

大熊:点字を覚えるのは簡単でしたか？

システムを覚えるのは簡単だったのですが、読む速度を上げるのは非常に時間がかかりました。けれど、大学の教育や勉学には点字を覚えるのが必要不可欠でした。

北野:完全に見えなくなったのは？

上を見て太陽が感じられなくなったのは15年前。だから、30年に涉って、徐々に悪くなったことになります。

大熊:病気の名前は？

網膜色素変成症。一般的な目の病気です。進行状況が非常に多岐にわたり、急速に悪くなる人、長い間かかって悪くなる人、がいます。

大熊:心理的トレーニング、とは？

難しい質問です。自分が盲人である、と自覚する事によって、人生に限界がある、と受け入れる事、そしてそれにもかかわらず残されている可能性をどう活かしていくか、について心理学者とではなく、盲学校の先生や友人と話し合う中で、両親と話し合う中で、自分で気づいていきました。51年当時、盲学校はあまりそういう分野では進んでいなかったのです。

大熊:今ならどういう教育を？

今なら当時はなかったようなリハビリ、眼科の医師が十分に検査して、視覚障害者センターに送って、視覚がどのくらい残っているのか、の技術的判定をします。その後、カウンセラーやソーシャル

ワーカーの社会的療法も施されるから、昔とは違います。

生まれつきでない人のために、教育やリハビリは非常に大きな役割を果たします。

北野: 障害をベントさん自身は普通に受け入れたのですか？

私自身はそれによる人生の危機は一度も持った事はありません。ただ、目が見えないために、「これがやりたいんだけどもあきらめなくては」と思う事がありました。先ほど、大学時代大変だった、と申しあげましたが、そのころ、「他の学生は楽だなあ、本を開ければいいだけだから」と思いましたよ(笑い)。

大学に入ったとき、すぐに英語の勉強を始めました。英語学科の図書館に行って、学生があまりに少ないのにびっくりしました。こんなおもしろい本がいっぱいあるのになぜ読まないんだ。目がよければ一杯読むのに、と思いました。私にとって、目が見えないのは、悲しみではなく、悔しい、頭にくることでした。「頭にくる」という表現がぴったりくるかもしれません。

大熊: 盲学校のあと、普通の高校に行かれたのですね？

高校でも友人がたくさんいたし、校長や教師達も私が目が見えない事を理解してくれました。けれど、当時は、教育的サービスが全くなかったので、高校を卒業できたのは、家族のおかげでした。両親も姉も非常に協力してくれました。両親とも、高等教育を受けたことがない人ですから、外国語も出来なかったのですが、私に読んでくれるためにフランス語もラテン語も英語も勉強してくれました。自分にとって本当に困難だったのは、学校時代で、その後の困難はそれに比べると何でもなかったといえるほどです。

その時に経験したことが、後の私の障害政策に非常に影響を与えています。

大熊: ご家族は具体的はどのような支援をしてくださったのですか？

父母や姉たちが、前に座って大きい声で読んでくれました。それを点字にするのは私でした。日曜日の午前中、姉がラテン語の教科書を読んでくれましたが、これは翌週の分でした。

北野: 外国語を学ぶための点字の辞書はあったのですか？

小さくて簡単なものですが、ありました。それで十分役に立ちました。大学では英語もドイツ語も勉強しましたが、その国の学生図書館に、その国の点字版を借りました。ドイツやイギリスの図書館に私はこういう本を読みたい、と言う長いリストをおくと、その中から送ってくれました。

点字の本はとてもかさばるものです。そのころ、ルンドの郵便局に、大量の点字資料が届いたので、私のために特別な部屋を用意し、そこからタクシーで家に持って行ってくれました。ルンドの郵便局

員に会ったとき、私だと知らないで当時の事をはなしてくれました。「フローレンス協定」があるので、点字郵便は世界中、無料です。1960年頃、協定が結ばれています。

大熊:お姉さまはどういう道に進まれましたか？

上の姉は、商科に行って経済を勉強しました。亡くなる25年前、炭酸入り水を作る会社の経理をしていました。世界で一番おいしい水の事は私に聞いてください(笑い)。

下の姉は会計士になりました。夫と一緒に会計士として独立していました。

上の姉には娘クリスティーナがいましたが、下の姉には子供が恵まれず、47歳でガンで亡くなりました。上の姉は4年前に70歳でなくなった。父も私が21の時になくなった。彼が亡くなる前に高校を卒業したので、彼の人生にとってほっとしたと思います。

大熊:ご両親はどうやって英語やドイツ語を勉強したのでしょうか？

父も母もマスターできず、スウェーデン語風にローマ字読みした。英語を勉強しているとき、試験で文法の本を400ページと700ページを2週間かけて読んでもらって、点字で写した。今思うと、大変だったのは私ではなくて、両親の方だったと思います。

北野:盲学校は何人くらい？ 何年間の制度？

150人の生徒が勉強していました。1年から8年まで。そのころから統合教育が始まって、私が入ったときに1年を始めた人は、8年まで終えないで、8年目は普通学校に行くようになりました。

大熊:リンクビストさんが1年だけで普通学校に戻ったのは、当時としては珍しい事だったのですか？

9ヶ月しかいませんでした。10月から、6月まで。非常に珍しい事でした。父の姉が紹介してくれたが、入ったのが8年生の時だったので、そして自分は普通の高等学校で勉強したかったの。一般の高校に盲学校から行ったのは、私が初めてではなくて、3番目でした。

■将来の夢はジャズミュージシャン■

北野:当時の盲の方の進路は？

そのころスウェーデンでは盲人のための二つの特別教育がありました。女性は電話交換手。男は当時鉄鋼産業が隆盛だったので、溶接やフライス(磨く)の仕事です。交換手以外には、事務所や医者秘書になるための教育がありました。

スウェーデンが近代化され、新しい社会になったのは50年代からでした。スウェーデンの福祉社会は第二次世界大戦後から作られてきたものです。スウェーデンは戦争に参加しなかったので、経済

状態はよその国よりよかったので、その点、有利でした。福祉社会をつくる事の中に、障害者政策もあつたのです。

大熊: 病院秘書、とはどのような仕事ですか？

カルテを書く仕事。医者がテープレコーダに吹き込んだものをタイプするのです。

北野: 交換手やフライスエの仕事を目撃している中で、俺はこれはしない、という大きなビジョンがベントさんにはあつたのですか？

将来の夢はジャズミュージシャンでした。プロになりたかつたのですが、親に学校に行け、と言われました。21歳の時、高校を終えたとき、なろうと思ったらドラマーのプロになろうと思えばなれたのですが、大学に行くことにしました。

北野: 大学にいこうと思つたわけは？

高校の成績は、語学が非常に得意だったので、大学でもやってみようと思つました。大学に入つてからは、教師になるのもいいかな、思うようになりました。

大熊: 高校の時の語学の科目には、どんなものが？

色々なコースがあり、私はラテン系のコースをとりました。最初から語学を中心にしたコースでした。その時、英語、フランス語、ドイツ語、ラテン語を選びました。数学は最初の年に1年やりましたが、あまり興味なかつた(笑い)。

北野: 記憶力は抜群？

そうですね、割合。私は自分の事を「ベント・リンクビストは頑健な体の上に、まあまあ悪くない頭がある」といっています(笑い)。体が疲れないのが非常に有利です。

大熊: 大学に入つてからも、お母さまが勉強を助けてくださったのですか？

姉たちは自分の仕事があつたので、母が助けてくれました。父は早くに亡くなつたので。母はヘルシンボリに住んでおり、ルンドから1時間の距離だつた。当時は、視覚が少し残つていたので、移動にそれほど大きな障害はありませんでした。

ただ、大学に行くためルンドに行ったとき、「読んでくれる人を求む」という新聞広告を出しました。お金もなかつたので、無料でやってくれる人を捜しました。その広告に応じてくれ人が何人かいて、私は本を持って、彼らの住所を持って、何日の何時に誰々さん、と歩いて回りました。一番多いときに

は14人いました。人数が多いので、つき合いを深めることもできませんでした。

■ドラマラー・教師・放送ディレクター、そして……■

大熊: 8年間、ずっと無料奉仕だったのですか？

最初の年だけ無料でした。57年に生涯の伴侶になる女性、グンデスに出会ったからです。ドラマラーで働いているとき、ダンスレストランで出会いました。彼女が点字を学んでくれました。彼女はボローに住んでいて、そこで会ったのですが、私に書く手紙を他の人に読まれたくなくて点字を学んだのです。彼女は点字が非常に得意で、技術も向上したので、盲学校が1960年に点字の先生として彼女を雇うことになりました。以後40年間点字の仕事の携わり、今は教師をしています。

彼女は大人になってから目が見えなくなった人たちの点字の集中コースを担当しています。当時、彼女は17歳で、夏のアルバイトでダンスレストランのウエイトレスをやっていました。私は、そこにドラマラーとして出演していたのです。

大熊: お二人はどこに惹かれあったのですか？

きれいな人でした。そのレストランでドラムのソロをしたとき、一人で踊っている人がいました。ピアノの人に、誰？と聞いたら、彼女でした。そこで、ナイトクラブに一緒に行きませんか、と誘いました。そしてその夜2時か3時にナイトクラブに行って、それ以来我々は一緒です。ロマンティックでしょう(笑い)。

ライバルはいっぱいいたようですが、全然気にしませんでした。私は、その時は夏休みのアマバイトだったので、ルンドの大学に戻りました。彼女は、一年後にルンドにウエイトレスの仕事を見つけてルンドに引っ越してくれました。そして、私の勉強のために点字を打ってくれ、それでメキメキ技術が上がって、60年には、それが仕事になったきいうわけです。

大熊: お子さんのことについて話していただけますか？

娘が二人います。一人は芸術家、一人は生化学者、医学教育を受けていて、36歳で来年教育が終えます。子供が小さいのによく頑張るな、と感心します。芸術家の方は油絵が専門で、2年前に大学を出ました。孫は走るのが大好きで12歳、音楽学校に言っています。私は若いときに走っていたから、孫がランナーなのは嬉しいです。

大熊: 障害を持つ人の運動にはいつ頃から？

57年、目の見えない子供が普通の学校へ行くためのアドバイザーの仕事に就いたのが最初のきっかけです。パートで、学業の傍らでした。50年代の終わり頃から、盲学校は「ここで勉強するのではなく、普通の学校で勉強しなさい」と推奨するようになりました。その学校の校長先生が私に、学生

のアドバイザーになってほしい、と言われました。そこで、私はスウェーデンで初の「移動アドバイザー」になりました。二人でストックホルムに移ってから、彼女は本格的に点字に携わりました。私は大学生とアドバイザーの二足のわらじをはいていました。

学業に専念したいので、ドラマーは休業状態でした。ドラマーは巡業で時間を取られる仕事なので。それ以前、15年間もドラムを叩き、63年にはストックホルムの有名な楽団から誘いを受けたのですが、週に6日、夜の仕事だったので、しばらくあきらめる事にしました。80年代から復活したのですが。

アドバイザーの仕事は65年までの8年間続けました。65年に教職課程を終え、教師の資格を取り、ストックホルムの女学校の教師として1年間働きました。66年に学校を辞めました。非常にいい仕事の誘いを受けたからです。スウェーデンラジオのプロデューサー養成講座へ誘われました。半年そのコースをうけ、スウェーデン放送でプロデューサーとして教育番組を作る事に携わることになりました。

そのプロデューサーの契約を結ぶ直前のことです。盲人協会から、視覚障害者教育について研究する仕事、教育サークルに携わる仕事に就かないかと誘われました。結局、盲人協会の方に行く事になり、協会の仕事を半分とウプサラ大学での研究を半分という生活を5年続けました。

私を盲学校に紹介した叔母は、当時、労働市場庁に働いていましたが、ラジオ局に就職しないのを残念がりました。普通の職場に就職する事を望んでいたのです。でも、私は、協会で働けば、自分が戦ってきた問題、特に教育を受けるために大変な思いをした経験を生かして、他の人を助ける仕事に携わる事が出来ると考えました。

大熊: ベンクトさんは、盲人の初めて普通学校の教師になられたのですか？

そう、歴史上に初めてでした。教師の資格、認可を受けるにあたって、教育長が、「障害者で教師になるのは問題ないが、こういう障害は困る」という条件をいっばいつけました。私が教師になるべきかどうかについては、マスコミでも討論されて、私は勝ったのです。英語とドイツ語の教師でした。私は、ハンディを補うため、生徒達に参加してもらおう事にしました。毎回の授業ごとに、生徒を自分の秘書にして板書させました。私が目が悪いとわかると、生徒のあいだに協力体制ができあがりました。何とか先生を手助けしたい、と思うらしく、協力体制ができあがったのです。

北野: 私が親しくしているジュディー・ヒューマンも、アメリカで教師になる際、大変でした。

そう、全く同じです。僕も彼女の事をよく知っています。新しく労働市場に出ていく人たちにとっては、自分のためだけでなく、後の人のためにも、新しい分野を開拓する必要があると思います。

何週間か前に、25人の視覚障害の人と会いました。彼らはこれから教育を受ける人でした。私は、「あきらめるないで、戦え。自分たちの後に続く人たちのために、大使として戦え」と言いました。これ

から新しく市場に出ていく人に、「何でも全部受け入れ態勢が出来ていると思っては困る。戦ってください」と言いました。

大熊: 女学校は招かれたのですか? 雇ってほしいともうし入れたのですか?

私が仕事を求めました。校長が非常に理解がある人で、「あなたが教師としてここに働くと、将来いろんな困難に出会うだろう。だがそれを解決するのに協力します」といってくれました。これには、後日談があって、その校長の息子が、それから数年後、目が見えなくなったのです。私は恩返しすることができました。

北野: なぜスウェーデン放送は貴方をスカウトしたのでしょうか?

なぜか? は自分ではわからない。教育コースの先生が私の存在を伝えたのではないかと思います。

大熊: それは目の見えない人のための番組なのですか?

そうではなく、高校の英語の番組です。目の見える、見えないは関係ありませんでした。非常に大きなプロジェクトで、非常に話題になったものです。その新しいプロジェクトのために優秀な人がたくさん必要だった。

北野: この仕事をあきらめるのは残念だったでしょうね。

でも後悔した事はありません。自分は、なりたいたと思ったら、ラジオのプロデューサーにもなれるんだ、というのは非常に嬉しい、刺激的でした。ジャズプレーヤー、教師、プロデューサー、結局、自分は障害者のために働いているのですが。

大熊: 放送局ではどんな勉強を?

主題を決め、それについてどういう風にプレゼンテーションするか、時間内に終わらせて、その後大きな余韻を残すにはどうしたらよいか、について学びました。1時間のインタビューを5分間に縮める、1時間の中で一番大切なものは何か、何を視聴者に聞かせるのか、という事も学んだ。たぶん、おふたりは大学の先生として、それを毎日やっていたらしゃるのでしょうか。

大熊: そのようなことを身につけたことは、政治家になったとき役に立ったでしょうね。

そのとおりです(笑い)

大熊:番組もいくつか作ったのですか?

自分一人で独自の、というのはなかったけれど、共同プロデューサーとして作った事はあります。たとえば、ラジオのシリーズで「再びスウェーデン語を」という番組を作りました。

北野:盲学校を紹介してくれたおばさんは貴方に影響を与えたのですか?

盲学校に行っているとき、彼女の家に住んでいたのも、彼女から色々な影響を受けました。彼女はビーバンといい、労働市場庁で障害者が働くための部門に専門的に手がけていました。彼女は障害者に関心を持ち、よく知っていて、ありがたい存在でした。

■協会から連盟に、そして「万人のための社会」のスローガン■

大熊:視覚障害者の組織にはいつから話をしてください。

67年から85年まで、18年働きました。最初の5年はウプサラ大学とパートで半々に働いていました。その時の私の役割は、色々な団体の事業を発展させる、デベロッパーの役割でした。そして75年に連盟の会長になりました。85年まで、会長を10年間続けました。そのころから別の形の障害者政策、政治がないかに興味を持っていた。さかのぼれば、70年には、障害者のための政治活動に興味を持っていました。

77年に障害者団体の大きな傘であるHCKの会長になりました。障害者団体中央連合会です。HCKの会長も85年まで続けました。これはフルタイムの仕事ではなく、無給の名誉職のようなものでした。

82年に私は国会議員に立候補する事を承諾しました。79年に誘いを受けていたのですがその時は断ったのです。障害者団体の中でやる事がたくさんあったからです。82年に社民党の当時の書記ステン・アンナソンに誘われOKしました。ストックホルム市の議員でした。82年には視覚障害者連盟の会長、障害者連合会長、国会議員と3つの仕事をしていました。常軌を逸した日々でしたが、これを85年まで続けました。85年に社民党が選挙に勝って、そのまま議員として残る事になりました。

大熊:その時パルメさんから大臣にならないか、という誘いを受けたのですね。

ええ、85年10月14日の出来事でした。その時、私は視覚障害者連盟で会議の準備をしていました。ここにいるエバさん、彼女は、当時も私の助手だったのですが、彼女から「ウィルソンから電話してほしいそうです」と言われました。それがパルメだったのです。でも、私は「一体何の用事があるのだろう、こんな忙しいときに。後で電話しよう」と思っていました。45分たったとき、私はエバから「すぐにタクシーに乗って来てほしい」と伝えられました。その日の10時15分に総理府に行き、1時にプ

レスコンファレンスで大臣になる事が発表されました。

85年10月14日は、私の人生の中で一番みんなからお祝いされた日です。国会に出かけたら、国会の門番が大きな花束をくれました。その後もいろんな人からお祝いの赤いバラの花束をもらいました。私の家の近所の2軒の花屋はみんなバラが売り切れしました。1000本のバラをもらったのです。一生の中で忘れられない日です。

大臣になると他の仕事と兼務が出来なくなるので、障害組織の仕事を病めました。首相だけが自分のボスなので。

■盲人協会から視覚障害者連盟に■

大熊: 視覚障害者連盟にいて、成し遂げた事は？

会長として一人で成し遂げた事はありません。みんなとの協力関係で成し遂げたものばかりです。まずした事は組織の近代化です。そして目の見えない人のために書籍や新聞を、目の見えない人の手に届く運動をしました。かなり成功しました。

また、障害者自身がどうやって社会に影響を与えるか、影響力を行使するにはどうしたらいいか、について運動しました。

大熊: どう近代化したのでしょうか？ 昔はどうだったのでしょうか？

私がかかわりはじめたときこの団体は盲人協会といい、目の見えない人だけの協会でした。弱視の人は全く入る事が出来ませんでした。それを換え、弱視の人も含めるようにして、盲人協会から視覚障害者連盟と名称を変えました。1889年に設立された盲人協会の伝統ある名称を、77年に変えたのです。組織についていいますと、それまでは、国を網羅する全国段階と県段階しかなかったのですが、市町村段階にも置くことにしました。

スウェーデンは当時、地方分権で福祉の政策も市町村に権限を移そうとしていましたので、我々の組織もそれに合わせたのです。もうひとつ、多様な変更がありました。盲人協会は障害を持った人のために様々なサービスをする団体でした。生まれ変わった視覚障害者連盟は政治団体です。名前を変えることによって、昔からの組織はなくなったともいえます。

大熊: 反対はなかったのでしょうか？

盲人協会の偉い人たちはみんな反対した。団体の名前を変えて、入会資格を広げる試みは60年代にも70年代にもあったのですが、古い指導者の反対で2回失敗していました。私は団体に入ったとき、教育担当で講習会やサークル担当責任者でした。全国を回って、変革の必要性を説いて回りました。それで、会員の中に私の考えに賛同してくれる人が増え、下からの変革で実現したのです。9

5パーセントの会員が改革に賛成してくれました。

大熊: 反対勢力にも、大義名分があったと思いますが……。

いくつか理由をもってきました。税制の問題もありました。組織を変えて、会員を広く募る事になると、税の優遇措置がなくなるだろう。盲人連盟は歴史うぐいので、名前を言えば誰でもわかる、この知名度を捨てるのはもったいない。

けれど、95パーセントの会員が新しい組織、政治団体を求めています。名称を変更しても不都合なことは怒らなかったし、税制も変わりませんでした。このことで、会員は倍増しました。盲人協会当時6000人だった会員が、視覚障害者連盟になって15000人に増えました。

■72年、すべての市町村に障害者委員会が■

大熊: 社民党には、いつ入党なさったのでしょうか？

60年代終わりです。68年頃、教育大臣をしていたパルメの演説集を読んで感動して黨員になったのです。69年にパルメは党首になりましたが、その時には私は黨員になっていました。会合にも参加しましたが、アクティブではなく、役職にもつきませんでした。

大熊: サービス団体から政治組織になる、ということはどういう事を意味しているのでしょうか？

盲人協会はサービス提供組織として色々なサービスを作りだしていました。会員のための本、新聞、を作る。盲導犬の仲介。補助金の相談を受ける。政治団体になったとき、これらの機能は社会に任せよう、我々は障害者の立場を強くするために世論に働きかけよう、と言う事になったのです。

70年代は、スウェーデンで障害者団体が政治に参加するようになった画期的な年代でした。障害者の団体に色々な事が起きました。72年、障害者団体で「万人のための社会」というスローガンのプログラムを作りました。その時、政府から、すべての市町村と県に、障害者委員会を設置する、という決定が出ました。

70年代は、市町村に障害者委員会を設置する長いプロセスでもありました。委員会の半分は障害者から出てきたので、視覚障害者連盟がコミューンにも支部を置いたのは間違っていなかったのです。

3つ目に、国で行っていた障害者調査、というのがあります。この調査は10年間行われ67年に完成しました。この調査に当たっては、我々の団体は色々働きかける事が出来、非常にラディカルな提案をしました。

大熊:「万人のための社会」というスローガンが出来る過程と、どうして広がっていったのかについて話していただけますか？

これは全くチームワークの産物です。HCKが障害者のための社会参画のためのプログラムを作ったとき、色々な枠組グループを作りました。誰が言い出したのかわかりませんが、みんなで拍手して、「いい言葉だ」と思った。「社会に訴える力がある」と思った。そのころは政治的にも追い風に乗っていました。

社民党が政治的にも力があって、その社民党が障害の分野に力を入れていました。当時のスウェーデンのインテリ階級は68年頃の社会運動に非常に影響を受けていました。68年には社民党が1党で多数を得る、という大きな成果を収めていました。そしてパルメ首相はビジョンを持ったすばらしいリーダーだ、と多くのひとが思っていました。新しい事も彼の元では出来る、とっていたのです。

大熊:店や駅や学校など大勢の人が使う建物にバリアフリーを義務づける法律が70年にできたのもこのような思想に基づいているのですか？

その通り。建築法は66年に出来ていましたが、障害者のために使いやすい建物を、という70年の改定も同じ考えから来ています。

4番目は、75年に社民党が障害者のためのプログラムを打ち出した事です。このように、障害者にとって70年代には非常に大きな動きがありました。市町村にある障害者委員会や色々な障害者団体の発言権もこの70年代に非常に大きく盛り上がりました。

このようにイデオロギー的に非常に社会は盛り上がったのですが、実際に、社会を万人のものにするには大変な時間がかかりました。

大熊:76年に社民党が負けたことも影響していますか？

非常におもしろい質問です。保守連合が44年ぶりに政権を奪ったのが76年です。彼らにとっては国民が望んでいるものを与える事が大切でした。政権をとってから数年後は、社民党以上に国民の声を聞こうとしていました。

社民党が政権を持っているときは、何かを実現するとき同僚と議論が必要でしたが、保守連合になったら非常にオープンで飲み込みも早く、とても仕事ははかどりました。けれど、基本的な違いがあります。

社民党にはグンナン・ストレングスという非常に強い大蔵大臣がいました。彼はお金がなければ、国費で何かをする、ということは絶対にしなかった。ところが、保守連合が政権をとってから非常に気前よくやり、数年後には破産寸前になってしまいました。そのころから障害者団体への援助も減っていきました。後では難しくなったが、保守連合が政権を執った最初の頃は、色々やってくれまし

た。

■障害団体どうしが手をつなぐということ■

大熊:HCKの中での力関係は？

いつも勢力争いで大変でした(笑い)。HCKは世界で一番古い障害者団体間の協力組織です。1942年に既に作られています。伝統のある組織ですが、内部抗争は非常に激しいものがありました。ただ、内部は意見がバラバラでしたが、外側は一致していました。対外的に力を示そうとするなら、内部は意見が一致しなければ行けないということでは、みんなが意見が一致していたからです。のちに大臣になったときには、交渉をする、とか、譲歩するとか、みんなで協力する、とか、ここでの経験が非常に役に立ちました。

大熊:どのような意見の相違があったのでしょうか？

何を優先するかです。我々視覚障害者からみると、身体障害者が訴える問題はさして重要じゃないように思えます。逆もまたしかり、です。どの障害者団体も抱えている問題が深刻だったので、「私たちは譲歩しましょう」「あなた方がお先にどうぞ」という訳にはいかなかったのです。

北野:HCKには知的障害、精神障害、親の会も入っていたのですか？

すべて入っていました。知的障害者の場合、これは非常にとても強いFUBという親の会が入っていました。ただ、私たちは、「障害を持った人自身が自分たちの権利を主張するのが大切だ」と考えています。だから、本来なら障害者自身が声を上げなければならないのですが、知的障害者と子供の障害者は力が弱いので、親の会を認めました。

視覚障害者の場合は、たとえ2歳でも子供が会員です。だが、18歳までは、色々な機会には、両親の片方が代弁する事が出来ることになっています。

北野:会長である貴方は、視覚障害で中途障害。先天的な障害者や自分とは違う障害者ことをどうやって理解したのですか？

会長として働くようになって、非常に強く感じたのは、「私は視覚障害だが、身体障害や聾啞の障害が私の障害と同じくらい大変だ」というのが私の立地点だということでした。そのような立場に立ってみると、視覚障害者団体が権利を主張しすぎるように思える事がありました。私としては、一番の問題点は社会が障害者を疎外する、これが、みんなが共通に戦わなければならない一番重大な問題で、団体間の問題はそれより前に来てはいけない、と思っていました。

北野:日本では身体障害者の団体、知的障害者の親の会、精神障害者の親の会、が大連合をくめない状況があり、これが、とても大きな問題なのですが、こちらではどうだったのでしょうか？

そういう考え方は捨てるべきです。私が国連の仕事をしている中で、一番の任務はその部分です。様々な障害団体が一致協力して働きかけるように、としている。日本のような状況でしたら、アクションプログラム、みんなが後押しできるような強力な行動プログラムを作って、これをみんなでやろう、とすることが大切だと思います。一致協力する事が大切です。色々な国でそのやり方で障害者団体間の距離が縮まっていっています。

北野:どの団体がイニシアティブをとるかで問題はなかったのですか？

難しい問題です。共通の問題を認識し、こういう解決がある、と認識すれば、団体間の抗争やイニシアティブの問題は一義的に出てこないのでは、と思いますが、確かに難しい。私の場合、視覚障害者団体が声を上げすぎる、と注意したとき内部から批判も出ましたが、賛成する人もいて、議論をする中で、私は認められました。議論をして、共通の議論、利益を見つける事が大切だと思います。

北野:HCKの会長は代々視覚障害者なのですか？

私の前任者は視覚障害者団体の副会長でしたが、後任は身体障害者連合のバールブローさんでした。

さきほど出た障害者団体どうしが協力できない、みんな利益を主張する、と言う問題についてですが、古い体質のままなのではないですか？会員のためのサービスが優先されているのではないのでしょうか？そうではなく、一段上って、問題を解決するためには、政治的な目標を定めなければならない、政治家と交渉しなければならない、となります。

北野:その通りですね。日本の組織はサービスを提供するためのお金を引き出す事に一生懸命という傾向があります。

サービス活動をいつまでも持っている、どうしても自分たちの利害にしがみつ়くこととなります。組織を政治的なところに引き上げ、サービス活動は別団体を下に作ってさせればよい。我々が視覚障害者団体の近代化をしたときは、サービスを中心的な役割からはずしました。視覚障害者のための図書館を国に移管しました。残りのサービスも、サービス管理会社IRISを作り、そこにさせることにしました。団体のトップはそこから自由になったのです。

■本の音訳、2. 5%から25%に■

74年から75年は、一般に出版される本の2. 5パーセントしかテープに吹き込まれなかったのです。これはおかしい、と私と司書が二人で、戦略として訴える手紙を書きました。出版される本の、少なくとも25パーセントはテープに吹き込まなければならない、と主張しました。私が大臣になるず

っと前にバルメに会ったとき、「視覚障害者の本が少ない」と訴えました。今では25パーセントが実現し、それ以外でも吹き込まれるようになりました。ならば視覚障害者用の図書館はいらぬ、と変わったのです。今現在は、年間に3000から3300タイトルの本がテープに吹き込まれています。

大熊：何の25パーセントですか？

毎年出版される本の25パーセントです。スウェーデンは年間1万から1万2000冊出版されますが、これの25パーセント。そして、そのうち大きな規模の図書館が買い上げるのは5000冊。残りは読者層の狭い本です。この5000冊の半分はテープになります。この25パーセントの本を吹き込むポリシーを打ち出したとき、残りの本の吹き込みサービスが入った。地方の小さい図書館でも「この本を読みたいから吹き込んでほしい」と言えば、吹き込んでもらえます。人気のある文学書は、12000の中の400前後。ですから、3000くらい吹き込めば、希望はだいたい網羅します。これを実現させたのは私と視覚障害者団体で働いていた司書の二人でした。

大熊：このとき、著者は著作権は放棄するのでしょうか？

テープの図書館は1950年代に出来ました。当時著作権の問題になり、三者契約、障害者団体と国と作者の間の契約が結ばれ、図書館が吹き込む場合、国が作者にお金が払う、という契約が結ばれました。一回あたり100krくらい。

大熊：私の本には、「点訳、音訳はご自由にどうぞ」とあらかじめ書いてあります。ところで、日本の視覚障害者は、すべての情報を見渡しにくいので、情報を吹き込む人の影響を受けやすい、と北野さんがおっしゃっています。政治家はとくに全体状況をつかむ必要があると思いますが、ご自身、どう対処しておられますか？

そういう危険が常にあることは意識しています。それを補うために、多くの人と話すようにしています。目の見えるアドバイザーをつけるようにしています。でも、我々からいいますと、目の見える人は余計なゴミのような情報を読むでしょう(笑い)。目の見える人はそれを読んでしまう。

以前バルメと話をしていた、「スウェーデンの日刊紙を視覚障害者の目の届くようにしてほしい」といったら、あんなもの読んでどうする、文学書にしなさい、と言われた。実は、その日、ある日刊紙がバルメの事をうんと悪く書いていたんです(笑い)。

大熊：先ほど障害者自身が影響力を行使する事が出来るように支援した、とおっしゃいましたが、どのような支援でしょうか？

新しく組織を変えたとき、会員教育、団体の役員として機能する人の能力向上のための教育をしました。自分たちの意見をどうやって発表するか、の教育も行いました。どのように社会が機能し、社会を変えるためにどのように影響力を使うか、の教育もしました。それはかなり効果を上げました。

大熊:それをどうやって?

各地域にある国民高等学校を5カ所と契約を結び、会員と役員のための講習会を一回に2週間、毎日違うプログラムで行ったのです。

実際に、社会をかえるための実践活動も行いました。テープに吹き込む書籍の問題、でも何が問題でどうすればいいのか、をいろんな団体で問題点を示して議論して、その結果を中央に送ってほしい、という方法をとりました。

北野:障害者団体が政治的活動を中心にする、どうしても、政党に巻き込まれる、イデオロギー化、セクト化する、という心配が出てきます。こちらでは、そういう心配はなかったのか、分裂がないか、教えてほしいのですが。

スウェーデンでもそういう議論は今もあります。多くの障害者団体は、障害者に住みやすいために、社会の改革、万人が住みやすい社会を主張しますが、その結果、どうしても左、と見なされやすい。我々の団体としては、政治的中立を守りたい、と思っけていても、政党の障害者政策を見ていると、左に見られやすい。社民党や左党、リベラルなど。これらの党首は障害者に造詣も深いので、そう思われやすい。確かに考え方も近いのです。穏健党という保守党は、「障害者運動に国を持ち込まないようになりたい」と思っけています。障害者団体は国にやってほしいので、穏健派の党員で障害者団体に所属している人はほとんどいません。

■LSS法が保守政権のとき誕生したわけは■

大熊:でも、LSSという障害者にとって重要な法律が保守政権のときにできました。いったいなぜでしょう。

面白い質問をなさいますね(笑い)。1980年代に私が障害者の問題に強く携わっていたとき、法律の導入が出来ないか、と法律調査委員会を作たまし。委員会ができたのは89年です。この調査委員会が、こういう法律はどうか、と91年に私にしてきた。これが後で出来たLSSの元で、実際にLSSになったときは部分的変更は合ったが、だいたい同じでした。9月に選挙が行われ、社民党が負けました。LSSは私の時に導入したい、と思っけていたのですが、時間的に間に合わなかったのです。けれど、選挙運動の最中にベングト・ベッセベリイという穏健党の人が「厚生大臣になったらLSSを導入する」と言っけてくれ、実際に導入してくれて大変嬉しかった。彼は障害者問題を重要視して、熱心にやっていました。彼は本当にこれがしたかったんだと思っけています。

それからこれは私の極めて客観的な考え方ですが、彼が厚生大臣になったとき、社民党政権のときよりうんと多くのお金を持っていました。改革をして、社会保険給付を下げたのでお金が余り、これが出来たのです。特に疾病保険の保障を下げたのですが、それは私たちは社民党のイデオロギーに反したので絶対出来なかったことでした。ですから、彼が持っていた予算は私には絶対、もてなかつた金額だったのです。正直なところ、社民党が勝つてLSSを導入したら、どこからお金を捻出したらよいかわからない状態でした。もしも、91年の選挙で社民党が勝つてLSSを導入できないという事

態になったら、私は大臣を続ける事はなかったでしょう。

北野: 一般の市民の施策を下げ、一部の障害者のための施策を行う、という事に対して反対意見はなかったのですか？

非常に大きな議論になりました。でも保守連合が選挙で勝ち、保守連合は国の歳出を押さえる事で政権をとったのですから。政治は本当に駆け引きです。

大熊: 日本では「高齢者は数多くて票になるけれど障害者は数が少なくて票にならない」と政治家がおもっているフシがあります。スウェーデンでも事情は似ているとおもうのですが、それなのになぜ、障害者政策が進んだのでしょうか？

障害者も家族がいます、子供がいます。かなり票集めが出来ます。HCKは81年から82年頃、会員が55万人います。大変な数の団体でした。そして25の障害者団体が賛助会員でした。ベステルベリイは、自身は障害者ではありませんが障害者政策に関わっていました。このような政治家は多いのです。彼は障害者と移民を政策の中心に掲げました。この2つのグループは保守連合が軽視しているグループなのですが、彼は政治家になる前に、医者勉強をしていました。

■ パルメに任命され、厚生大臣に ■

大熊: パルメとはいつ頃、出会ったのでしょうか？

いつ最初に会ったか、は覚えていません。同じ党員なので、彼が出た会議に私も出ていました。69年か70年のこと、彼の話ナマで聞きました。視覚障害者のための本や新聞の問題を彼と議論を戦わせたこともありました。70年にはパルメと蔵相と会議した事もあります。私が国会に入る前と、その後2、3回、政治の問題を議論した事があります彼が私を大臣にしたのは、おそらく、この2、3回の議論がきっかけだろうと思います。

82年の選挙運動では、4つの大きなグループが選挙のために働きました。LO労働者組合、年金生活者団体、賃貸住宅居住者連盟、それに障害者連盟。このときの働きが認められたこともあるでしょう。このとき、4団体の代表に私が選ばれていましたから。

大熊: ベンクトさんはパルメのどこに惹かれたのですか？

彼の輝くような知性です。ビジョンを持っていて、社会の発展を目に見えるように描く事が出来ました。彼の演説集を読むと、色々な問題を彼が掲げて、いろんな角度から、入り口から入って行って描き出す。そのやり方は美しいものでした。彼は演説台に立って、5万人の聴衆に語りかける、それが非常にすばらしかった。

私が一国会議員だった頃、社民党の議員は150人でしたが、彼は党の団長として活躍していました。週に1度の会合で国会に出す提案、政府の提案について議論しました。その際、パルメは、「な

「こんな提案を政府は出すのだ」という批判に対して、非常にすばらしく答えていました。内容が豊かで、洗練されていました。ただ、友達としてつき合いたくなるような人ではありませんでした。たくさん友達をもつことはなかったのです。彼が優秀すぎるからか、彼の近くにいると、気が抜けなかった。議員仲間としては、カールソン首相の方が非常につき合いやすかった。パルメはカリスマ、カールソンはリーダーでした。

大熊：ベントさんが厚生大願に就任して早々、パルメが殺されましたね。

4ヶ月後です。非常な衝撃でした。小さくて平和な国だったのに。パルメが死んだ悲しみだけでなく、スウェーデンが穏やかな国でなくなった、という悲しみもありました。事件以後、セキュリティキーポリスや、政府の建物に銃弾が入らないような警戒が入り、田園的な国から変わった。それ以前は、パルメがラッシュアワーにみんなが並んでいるところに並んで新聞を買っていたのに、そういう事がなくなっていました。我々は昔のスウェーデンに戻りたい。今のスウェーデンでも多くのよその国より安全だが、前とは変わってしまった。

大熊：大臣になりたいな、なれるかな、という気持ちはあったのでしょうか？

まったくありませんでした。パルメがそんな話を持ってきたのは、寝耳に水、でした。

大熊：就任の際、パルメは、選んだ理由を話しましたか？

なぜ私に厚生大臣になってほしいと思ったかについては言いませんでしたが、何人かが私推薦した、とはいいました。たとえば、ベステン・アンダーションという大臣と、副大臣のカールソンが推薦したそうです。厚生大臣になって、担当は家族、高齢者、障害者政策。いずれもお金のかかる政策だったので、大蔵大臣とは、なかなか折り合いがつきませんでした(笑い)。

大蔵大臣を尊敬していましたし、彼も私を尊重していたのですが、考えが違って、非常に対立しました。大蔵大臣は民営化や私有化を叫び、私はそれに反対しました。彼の考えの一番の敵対者の役割でした。反対した理由は、民営化や私有化で弱者、特に障害者が一番大変な目にあうと思ったからです。

■「万人のための社会」に反する民営化路線■

ニューリベラル派が、80年代の社民党に非常に根を張っていました。私が未だに政治的発言をするのは、「民営化が問題を引き起こすぞ」とメディアに言うときです。社民党の中で民営化反対運動をスタートさせました。この運動に若い人が多く参加してくれている事を非常に誇りに思っています。3週間前にアフンブラーデッドというタ刊紙に民営化反対の記事を載せました。「我々の聖域から

悪い考えを排除しろ」と。

北野: 貴方の民営化反対の最大の論拠は？

民営化という言葉には反対していません。だが、私有化、本当は社会が負わなければならない事業を商業化することに反対です。例えば、社会が負うはずの事業を利益追求のために使う。ナーシングホームにいる介護を必要とするお年寄りを利益追求の対象にすると、痛みを負うのはそのお年寄りですから。我々が非常に反対をしたことに、保育園の民営化があります。児童福祉を利益追求のために商業的にするのは反対だ、と昔から言っています。80年代の半ば、はスウェーデンの保育園はもともと統合された時代だった。その当時はお金持ちの子供、移民の子供、障害の子供、みんな同じ保育園に行っていた。児童福祉を利益追求にすれば、絶対に金持ちは金持ちだけ、貧乏人は貧乏人だけ、という分化が進む、と忠告しました。

2, 3年前、ストックホルム地区委員の政治家に会いました。80年代に民営化の議論をしたとき、かなりアクティブに動き、私と同じ意見を持っていた人物です。が、その後他の影響を受け、一部民営化を進めた。それで数日前会ったとき、どれくらい民営化が進んだか、を聞くと、保育園の半分が民営化、と言う返事でした。で、移民の子供はどこにいるか、貧しい子供、問題児はどこにいるか、と尋ねると、民営化されていない公共の保育園にいる、と言う。学校教育にも広がっていて、学校も民営化していく。そこにはエリートが集まる。これは「万人のための社会」という私の考えに反しています。

北野: 保育所の5割は for profit なのですか？

50パーセントが市町村、残りの半分以上を100としたさい、20パーセントは親が、後は私立企業。民営化には両方入っています。50年代に厚生大臣だったグスタフ・ムンドフは、「社会の中で最高のものだけしか十分でない。学校でも病院でも一番いいものだけを作っていけば、そこからはずれて行こうという人はいない」と言っていた。病院や学校をかなり質の高いものを作ってきたので、これらを民営化する必要はない、とっていました。本当は教会などに病院や学校をやってほしいが、彼らはやってはくれない。教会がやらないのは、コミュニンの提供するもので十分、と思っているから。だが社会の賃金格差が出来て、お金持ちの人は、自分たちのために都合のいいものを作ってくれるのなら、お金をもっと出しましょう、という姿勢になっている。

■福祉が遅れたアメリカ社会■

北野: これはアメリカナイゼーションですね。

私はアメリカを決していい前例と見ていないのです。アメリカは社会的には、福祉の面では非常に遅れている、と思っています。